論文概要書

趙宋天台における円融論の展開

弓場苗生子

一、本研究の意義

その始まりを言えばただ一代の独創にかかる天台教学が、その開宗の当時に在って画期たり得たのみならず、遠く歳月を隔てた現今に至るまでその精美を謳われる所以は、何よりその巧妙な円融論理とそれを体現するところの教学そのものの構成とが時代を問わず人心をして感嘆の念を抱かせるに足るものであるためと考える。一切の教説において最勝であり、かつ他の一切の教説をその中に包摂するところの円教の教説というものを創出せんとしたとして、徒らにその最勝や一切摂を主張するのみでは全く説得力を欠くこととなる。ここにおいて、そこに言うところの円融を、秩序だった構成を具えた体系として表現することが必然的に求められるのである。開祖たる天台智顗はこの問題を、所謂敵対的相即の発想に基づく弁証法的円融論理によって解決した。このことについて、例えば法数という概念に約して考えてみるならば、そもそも三毒・四諦・十界等々に代表されるところの諸法数とは、世間の諸法を任意の観点に基づき分類・総合したものであるとも言い得る。智顗は数多の経論から種々様々の法数を採取し、或いはこれに留まらず自ら考案して不足を補い、自らの内奥を披瀝するに際してはこれらを縦横に駆使して論理を展開した。これはただに説示の便宜や充実を図るという意義を超えて、更にそれら諸法数を三軌三法という一つの法軌の下に配当・類通することによって一切法の該摂を果たし、その幽妙な円融論理に具体性を獲得せしめるという目的によるものであり、天台の壮大にして緻密な教学体系はこのような規範のもと創り上げられたと言えよう。

しかるに、完成された教学を享受する立場にある後世の学者らにあっては、智顗におけるが如き教学建立の努力といった意識は自然薄いものとなる。湛然が三大部に註釈をつくった際、智顗の原意を祖述するに留まらず自らの発揮を加えたことは、華厳教学の発展や禅宗の流行といった時代の趨勢を受けてのことであったろう。そして宋の時代に至ると、宗教思想全般が民衆による強力な支持の下に大いに隆盛し、湛然の没後久しく停滞の時期に在った天台宗の教学研究もまた浮揚の機を得るに至った。天台の法脈は明州と銭塘という江南地域有数の都市においてそれぞれ師承を重ね、四明知礼を領袖とする一派と銭塘の学匠らを中心とする一派とはしばしば天台の正統義を巡って論戦を展開した。この論争が所謂山家山外の争いである。このとき両派の間で議論された種々の教学的問題もまた、極論すれば湛然が遺した課題を如何にして解決するかという点に集約し得るものであり、湛然以後の停滞期に在って保留されていた問題が宋代においてついに発揚した結果とも言えよう。本論文では宋代に為された議論を中心に、天台教学における円融論がこの時代において如何なる展開を遂げたかを検討したいと思う。

そもそも、一切諸法の代表である三法においてこの円融を論ずるに当たっては、これら相互の関係性がどのように位置づけられているかという点にまず注意を向ける必要がある。すなわち、三諦を例にするならば、空・仮・中の円融の関係においては三観の次第や

空・有（仮）の一対と中諦との対比等が前提として踏まえられる。このような階梯の部分を如何に理解するかということこそが、実質的に天台の円融に対する理解を示しているとも言い得よう。例えば両重能所の判や修性離合義に対する解釈等、趙宋期の学匠らにおいて三法の関係性自体に対する言及が数多く存することは、円融論の具体的な構造に対する注目の高まりを示すものとも考えられる。本論文では特にこれらの問題について詳しく扱っていくこととする。

近年趙宋天台を対象とする研究はやや増えてきてはいるものの、論争の詳細な内容に踏み込んだものは依然多くなく、この上さらに知礼の去世以降における展開となると扱われることは殆ど稀と言ってよい。そもそも、両派における思想的相異を論ずるに当たっては、正統派である知礼が華厳・禅宗義に浸潤された異端派を斥けたとする見方が、現在に至るまで根強く存する。このような見方のもたらす弊害としては、この正統・異端という分類が教説内容を検討する際に先入観として働いてしまうということがまず挙げられる。詳しくは後述に譲るが、山家山外の争いは、少なくともその初期にあっては宗内の分派間における対立と称して差し支えないものであった。二派の分系は中国天台宗第十四祖の清竦門下に義寂と志因の両名が出たことに始まり、このうち義寂の法脈を承けた知礼が一代の教学を大成して、四明の地に権勢を得、後に山家派と呼ばれる一流を築いた。一方、志因の弟子に当たる晤恩以下、源清・慶昭・智円・継齋・咸潤らの銭塘を拠点として師承を重ねた門派がこれとは別に存し、知礼から異端の謗りを受け、後に山外派の貶称を用いられるに至ったのである。このように両派による議論は四明と銭塘という地域的な対立の構図の下に発生したが、もと知礼の高弟であった仁岳が山家派を離反したことで、論争はその過程において一つの転機を迎えることとなった。この仁岳を後の従義と合わせて特に後山外派と称するのは、ただにその教説の連続性のみならず、従義もまた自らの師承に逆らい山家批判を展開したという事情に由るものであろう。もとより、知礼一人の教学に全面的に依って立つ山家派説に比して、山外派の立論は多数の学匠らの手に成り、かつ論争の進展に伴って発達を遂げた。したがって、これらを山外派という一つの括りにおいて見るとき、その主張内容もまた多分に不統一かつ流動的な性格を有することになる。天台宗の内部に留まらず他宗の学匠までもが山家説への批判に参加していたことも、様相をさらに複雑化させる一因と言えよう。このように、山外派の呼称を同じくするとは言え、その教説は論者個々人の思想や論争当時の情況を反映し、一口には概括し難いものがある。特に後山外の両師について言えば、こうした前提を顧みることなく、山外派の中でも後期に属する仁岳・従義の思想を以てこれらに先行する山外の諸師と全く同一と見なしたなら、一面において齟齬を来すことは明らかである。両師は当初知礼の所対破となった銭塘の学匠らとは異なり、元は山家の法流において知礼の教説を稟受し、加えてそれまでに交わされた論争の経緯をも踏まえた上でこれを批判しているのであるから、その立論がより体系的かつ発展した内容を得るに到るのも至極当然のことであろう。このように、議論の進展という観点を欠き、一定の対立軸に拘泥してこれによって論争全体を概括しようという試み自体、甚だ難があると言える。

安藤俊雄氏は『天台性具思想論』において、従来における山家・山外をそのまま正統・異端の別と見る解釈を踏まえた上で、極相異と極相順という言葉によって両派の相異を簡潔に説明されている。（同書二三八頁）ここに言う極相異とは他宗の教学に対して天台の

特色たる性具説を顕揚することを旨とした山家説への評であり、これに対して山外派は極相順の立場から他宗の教学との融和を目指したのであると解釈する。すなわち、両派の対立は智顗以来天台教学に本来存した二種の態度に各々依って展開されたものと考えるのである。山家・山外を字の如く正統派と異端派の別と見なすよりは格段に公平な評価であり、画期的な分類と言うべきであるが、論争の後期においてもこの分類が直ちに適用されるかといえば首肯し得ない部分が存するように思う。さらに円融論理という観点に照らすならば、安藤氏は前掲の著書において性具の観点から両派の思想を分析されたが、ここではむしろ相即義の解釈を焦点として、山家・山外の主張内容を検討することとしたい。具義と即義とはいずれも天台の円融論を説く上で不可欠の概念であり、この両義がそれぞれどのような内容を持つものなのか、また両義が如何なる関係にあるかを判釈することは、宋代の議論においても問題とされた部分である。本論文ではこの点について、特に即義の解釈という視座から両派の思想を論じたいと思う。

本論文は、天台独自の円融論理が趙宋期に隆盛した教義論争を通して、如何なる解釈上の変容を遂げたかを明らかにすることを目的とするものである。ここにおいて特に重要となるのは、円融論理の基礎となる即義・具義をどのような概念として捉えるかという点である。宋代において争われた教学上の問題は複数存するものの、ここでは取り分け別理随縁・理毒性悪の論争における相即義解釈を巡る議論、三法離合に対する判釈に焦点を当てて検討を進めたい。その中においては、四句分別や両重判、修性離合義等、従来ともすれば枝葉末節の論と見做されてきた部分も含まれる。この類の評釈は確かに煩雑の感を抱かせるものとも言えるが、しかしながら、これらにおいては単なる語戯に留まらない意義が存すると考える。すなわち、これらによって円融や相即・性具といった甚だ曖昧な概念が、論者において如何なる構造の下に理解されているのか端的かつ明白に知り得るためである。その他、後山外派や山家派の後裔による教説はこれまでの研究において論及される機会が少なかった領域と言える。これらについては重点的に扱いたいと思う。

二、本論文の構成

本論文の構成は以下の如くである。

序

緒論　趙宋期における論争の概要
一、四明派と銭塘派の対立
二、山家山外論争の展開
三、後山外派の論駁と山家派の後裔らによる評釈

第一章　智顗の円融論と湛然による解釈
一　智顗の教説中における四句分別の用法
一、はじめに
二、文字門・可説境としての意義
三、四句の有する多義性と、網羅された総体としての位置づけ
四、小結

二　三軌三法の開説とその展開
一、はじめに
二、三軌の構成
三、資成軌の有する意義
四、湛然による発揮
五、小結

第二章　四明知礼の教学とこれに対する反駁
一　四明知礼の教説
一、はじめに
二、敵対種に対する判釈
三、三種相即の開説
四、小結

二　後山外派説における相即の譬喩
一、はじめに
二、仁岳による相即義解釈
三、従義の所判に見える継承
四、小結

三　後山外派による相即解釈の来由――別理随縁の論争
一、はじめに

二、山家説における即義・具義の解釈
三、嘉禾子玄の立論に見える後山外派説への影響
四、小結

四　理毒性悪の論争
一、はじめに
二、理毒性悪論争の大勢
三、智円の理毒解釈と知礼による論難
四、智円の性悪義解釈における知礼説との同異
五、小結

第三章　神智従義の教説
一　従義による三身解釈
一、はじめに
二、法身および自受用報身に対する解釈
三、界外法性身義の強調
四、小結

二　複俗義に対する解釈
一、はじめに
二、複俗義の典拠
三、従義の教説における依用
四、小結

第四章　後世の学匠らによる論争の総括
一　智湧了然における二義判釈と具相家・具性家の判
一、はじめに
二、了然による「体」義の解釈
三、山外派説との相異
四、具相・具性判
五、小結

二　智湧了然の理性差別義解釈
一、はじめに
二、法身・寂土における差別相に対する解釈
三、「性用」の概念に基づく理性差別判
四、小結

三　柏庭善月の仁岳説批判にみる論争の総括
一、はじめに

二、仁岳説に対する基本的な位置づけ
三、法身無相義への論難
四、善月の相即義解釈
五、小結

第五章　修性離合義を巡る論争
一　知礼の示した判釈とその影響
一、はじめに
二、知礼による発展的解釈
三、後代の山家派に与えた影響
四、小結

二　山外派による修性離合義の解釈
一、はじめに
二、仁岳の離合義解釈――合掌型・川字型の離合判について
三、源清・智円による離合義解釈
四、小結

三　後期の山家派における修性離合義の判釈について
一、はじめに
二、景徳法雲の釈
三、無極可度の釈
四、柏庭善月の釈
五、小結

結論

附録　「別理随縁十門析難書」訳註

緒論においては、本論にて扱う趙宋期天台宗における議論について、論争の経緯や展開を大まかに整理するとともに、時代的・地理的背景を併せて概観したい。

第一章においては、四句分別の用例および三軌三法の教説に照らして、智顗の開説に成る円融論理が如何なる内容を持つものであるかを確認する。智顗における三法円融とは、敵対相即の論理を基礎として成り立つ教説である。ここにおいて一切諸法の統摂を円融の体系は、資成となる権法とこれに対する観照という関係を前提に、これらの対立を否定する過程を経て、はじめて具体性を伴って表現されることとなる。このような敵対相即に基づく円教論について、本論では四句分別を例にとり、その文字門・如来蔵としての性格とこれを媒介として示される円融のあり方を検討する。このような智顗による三法円融の論を踏まえた上で、これに対して加えられた湛然の発揮を、特に修性解釈という点に着目して考察したい。智顗によって不縦不横と位置付けられた三法の内部において修二・性一の

対比を設け、かつ修性三因の義を三法一般に適用したことなどは、湛然による新たな展開と言い得る。また、このような修性三法の説が後世に与えた影響については、第五章において詳説する。

第二章においては、初めに宋代において四明知礼が行った解釈について、敵対種および性悪説に対する判釈と三種相即義の宣説という観点から検討する。当体全是の語に端的に示されるが如く、知礼の示した相即義解釈とは、敵対機となる権法に対する究極的な肯定を強調するものであった。このような理解はともすれば安易な現実肯定主義を助長する危険性をも孕み、当時の対論者であった銭塘の学匠らのみならず、後には知礼の門流においてさえ議論を呼ぶこととなったのである。まず当時における批判として、殊に知礼による別理随縁の主張に対しては銭塘の学匠らによる批判が盛んに寄せられ、また智円に向けて示された理毒性悪の説についても銭塘側による反駁が為された。これらの論争においては、即義と具義の弁別の論もまた重要な焦点とされたのである。さらに、後年知礼の高弟であった仁岳が門下を離反し知礼教学に対する批判を展開するに至っては、銭塘派による議論を一部受け継ぎつつも、山家の教学を稟受した者としてその教説における問題点を指摘している。本論では特に鏡像・如意珠の譬喩によって説明されるところの相即義に着目して考察を加える。

第三章においては、知礼の在世時よりやや下る時期に活躍した神智従義の教学について検討する。従義は仁岳と同様に、山家派の法系を受けながらも知礼の教説に対して論難を与えたことで知られる。その主張においては、唯仮三千釈を基調とする三法の解釈が示された。この点について、本論では三身についての解釈および複俗義の依用という観点から分析する。

第四章においては、山家派の後裔である智湧了然と柏庭善月による評釈を中心に、後世の学匠らによる論争の総括について論じる。了然の所説においては任意の二義を立てる判釈を行う点が特徴的であり、従来の山家山外論争において大きな焦点となった理性の境界に相好を認めるか否かという問題に対しても、この二義判釈を用いて山家・山外いずれの立場とも異なる独自の解釈を示している。さらに前代における論争を総論するに当たっては、具性・具相という新たな観点に基づいて両派の思想的相異を説明していることは特筆に値する部分である。また善月の評釈においては仁岳説と知礼説との比較が為され、仁岳説を知礼説の前段階に当たる一往の義として位置づけるとともに、その所説の非を具義・即義に失している点に求めている点が着目される。

第五章においては、山家派の後代における修性離合義を巡る議論について総説する。湛然が示した修性三法の教説および知礼の『十不二門指要鈔』における新解釈についての検討は、知礼の後裔らに課題として遺されることとなった。本論文では先行研究における問題点をも検証しつつ、修性離合義に対する解釈を通して宋代の学匠らによる三法円融義に対する理解について考察する。

また、附録として第二章三節にて扱った「別理随縁十門析難書」（「附法智遺編別理随縁十門析難書」、『四明仁岳異説叢書』巻四所収・続蔵一―九五・四〇七丁右下～四一五丁左下）の訳註を掲載する。知礼の『十不二門指要鈔』において明かされた別理随縁説に対しては、永嘉継齊・嘉禾子玄・天台元頴の三師からそれぞれ批判が寄せられ、本書は知礼の高弟であった時期の仁岳がこれらの論難に返答したものである。この中に引用される

継齊の「指濫」、子玄の「随縁撰」、元頴の「随縁徴決」はいずれも今に伝わらず、また転向以前の仁岳の思想を窺い得るという点でも貴重な資料と言えよう。しかしながら、四明離反前の仁岳への注目の薄さ故か、あるいは批判対象とされる三師が殆ど無名の人物と考えられていたためか、従来の研究ではその内容に対する詳しい検討があまり為されてこなかった。そこで本訳註を示すことで、今後の研究の参考に供することとしたい。なお、ここにおいては続蔵本を底本とし、必要に応じて京都大学図書館蔵本（蔵経書院文庫本）を参考して文字の訂正を行った。